

ば・あ・や・の・う・け・う・り

「役割

「駕籠に乗る人かつぐ人そのまたわらじを作る人」。若い頃は、身分のちがいを言っているのかと。でも、歳をとるにつれて、人それぞれの役割の事かなと、思うようになりました。乗る役…かつぐ役…わらじを作る役の人…そして、どんなに偉い人でも、一人では生きられないし、誰でもやらなければならない役目があることも…。(当たり前のことですが…)そんなことを思い出させる新聞記事から～約70万人の汚水処理する、仙台市の浄化センター。海の近くにあり3・11の時…津波の被害に。緊急時は、汚水があふれないように、自動で扉が開き、汚水を海に放流するようになっていたが、翌朝、電源設備やパイプがズタズタにこわれ、扉が自動で開く役割ができない状態に気付く。手動でやるしかない、6人の職員さんが、余震や津波の恐怖の中、交代で鉄製の重いハンドルを回し続け、自衛隊の救助ヘリコプター最終便ギリギリに扉が開き、海への放流がはじまった。

「津波はこわかったけど…市内を、あふれる汚水から守りたい一念だった」…そうです。

最敬礼です。

昭和20年3月10日東京大空襲
東京の学校に行っていた、15歳の叔母がそこに。まだ…子どもでした。

逃げまわり地面にふせていたら「背中が燃えているよ」といわれ、ふり向いたら、上着に火が…。

校庭につくられてた、防火用水池に飛び込み助かった…と。

一緒に逃げた友人は不明に。

前年の19年10月23日は、大好きな兄さんが軍艦・愛宕の撃沈で戦死。

「俺が死んだら靖国へ」、兄の言葉を信じ毎年靖国神社へ。3月10日は、赤まんまを炊いて友人を供養。

誰を恨むでもなく、祈り続けた人。涙の数だけ強くも優しくも…その

生き方で家業を守り、周囲をいたわり、87歳の誕生日の翌日の夕方、

三日月に抱かれるように旅立った。

お返しできないほどの優しさを、それぞれに与えながら。

テレビで…甘酒は、飲む点滴…と。

この冬、「作り方教えて」と、麴で甘酒づくりに挑戦してくれた人が増えた。みなさん…同じように、発酵途中の台所にただよう香り…、でき上がった時の甘さに感動したよう…「砂糖もいれないのに…」と。

昔の人の知恵が伝わっていくのは、うれしいなあ…。

手作りのヨーグルトと、冷たい甘酒をグルグルかきまぜて食べてみた。後からお湯をゴクンゴクン…と。

味は、酸味と甘みがミックスでまあまあ…。

気になったのは…お腹の調子…

東洋の菌…と、西洋の菌…だいじょうぶかな…?

壁をつくってケンカ…なあって心配していたら、

お腹の中は…なかよしさんみたい…



黄色コブシの冬芽 1月